

前 言

前言

下校の道すがら、敏生少年の架空大相撲実況放送は延々と続けられる。アナウンサーになり切った彼は、双葉山の取組、わずか数秒の勝負を、真に迫った流暢な日本語で表現しようと思死だった。

「将来何になりたいか？」と聞かれれば、誰もが「皇軍の大將」と答える時代に、胎内での熟成？が敏速だったために「敏生」と名付けられたこの少年は、「アナウンサーになりたい」と答える変わり種だった。

将来の夢は実現できなかつたが、少年時代に培った語学の才能は彼の敏捷な思考を余すところなく発揮し、彼にもう一つの活躍の舞台――さまざまな人間模様織りなす司法界――を切り開かせた。

政局の激変は敏生の子供時代に、二つの政府と二つの全く異なる言語体系を強いたが、同時代の普通の子供がそうであったように、敏生もまた父母の手厚い庇護と厳しい教育の下ですくすくと育っていった。米軍の爆撃、日本の敗退、国民政府の遷移や、気球のように膨れ上った通貨インフレなど、さまざまな事件が次々と起こったが、敏生たちの子供時代に暗い影はほとんどない。

敏生が他の子供たちと違っていたのは、家中の蔵書をむさぼり読破する好奇心と、「母語」日本語を究めた語学の才能。これらは将来、彼が事業を興すための貴重な資本となった。